

アフェットフロアブルは
黒腐菌核病予防の
必須アイテム!

茨城県坂東市
木村 定男さん

【プロフィール】
坂東市岩井地区で代々農業を営む実家に30年ほど前に就農。夏ねぎ90aのほか、水田2ha、レタス1haを栽培。



圃場には霞ヶ浦を水源とするパイプラインが整備され、給水等の作業時間の短縮に繋がっている。

夏ねぎの大産地、茨城県坂東市

平坦な地形で年間を通して穏やかな気候、そして地下水に恵まれた茨城県西部に位置する坂東市。都心から50キロ圏内という地理的条件もあり、昔より首都圏への野菜の供給地域として農業が発展してきました。中でも夏ねぎは日本一の生産量を誇る、国内有数の産地です。

同市の岩井地区で農業に従事する木村さんは、地域の有志によって立ち上げられた野菜研究会「アグリフリーセブン」の会長を務め、「高品質でおいしいモノづくり」をモットーに、夏ねぎやレタス、水稻の栽培に取り組まれています。生産性や品質向上にも意欲的で、木村さんは「新しい品種や技術などは毎年試験を行い、アグリフリーセブンの研究会で情報交換をしています。それが、全体の栽培技術の向上につながっています」と話します。

苦境に陥った
黒腐菌核病の発生と
防除方法確立への道のり

30年に渡り夏ねぎの栽培に携わる木村さんが、「特に忘れることのできない出来事」として挙げるのが、2010年代前半に大発生した黒腐菌核病です。「見たことが無い病気が始まったと思ったら、2~3年で急激にまん延しました。当時は登録のある薬剤も無く、できることは被害株の抜き取りくらい。でも、被害圃場で作業

をした機械等を通じて、周りの畑にどんどん広がり、気付いたら多くの圃場で病気が出てしまう状況でした」。その被害は甚大で、一時は地域の収穫量が半減するほどだったそうです。「病気を抑えるため、土壌消毒等、様々な方法を試みましたが、なかなかうまくいかず、被害が出た畑は転作を3年ほど続けて菌を減らすしかありませんでした。でも、ねぎの栽培を再開すると、また病気が発生し、翌年にまた栽培を止めるという繰り返しでした」。産地が無くなってしまふ、そんな思いが脳裏をかすめる中、「アフェットフロアブルの適用拡大が明るい兆しになった」と木村さんは話します。「アフェットはメーカーさんからの紹介で知りました。使用方法が株元への灌注処理ということで、初めは処理液量の多さに戸惑いもありましたが(笑)、とにかく試してみようと思いました」。試験にあたっては、場所ごとに倍率や処理時期などを

変えて、一番効果的な防除方法を模索。「産地の存続が脅かされるような状況でしたので、とにかく必死だった。それだけに、効果を確認できた時はうれしかったです」と、木村さんは当時を振り返ります。

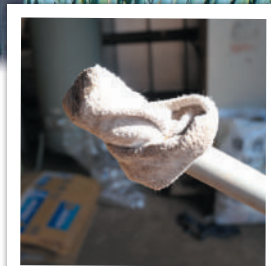
防除は今後も
土壌灌注処理を重視

坂東市の夏ねぎでは、冬の定植後、マルチとトンネルによる被覆栽培が行われています。そのため、冬の間も土壌中は黒腐菌核病の好適感染温度に保たれやすく、防除では定植後の薬剤処理が重要視されています。現在の木村さんの黒腐菌核病対策は、定植前に土壌消毒を行った後、アフェットフロアブルを定植後2週間以内に1回、生育期に1回使用する防除体系を実施。「この方法で黒腐菌核病はほぼ抑えられるようになりました」と木村さんは目を細め、今後についても「菌は土に存在しているので、黒腐菌核病の防除は土壌灌注処理を重視していきたい」と話します。

地域一丸となって課題に取り組む姿勢に、夏ねぎ全国一の生産量を誇る産地の底力を感じることができた取材でした。



取材時の7月末は夏ねぎの収穫時期の真っ盛り。自宅の敷地内の倉庫で調整作業に動かし中、ご自慢の一品を抱える木村さん。



薬剤処理は灌注専用のノズルを自作し、ホースで実施。水圧を抑えるために噴口には軍手を巻く。

〔産地情報〕

全国一の生産量を誇る坂東市の夏ねぎ。やわらかくて辛みと甘みのバランスに優れた「シャキシャキ感」に溢れる一品です。

木村さんのアフェット®フロアブルの使い方

		9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
栽培ステージ	そのシーズンの作付圃場		は種			定植	マルチ・トンネル被覆					収穫						連作は行わず別の圃場で作付
	翌シーズンの作付圃場													は種				定植
病害発生時期						黒腐菌核病							土壌消毒					収穫作業と並行しながら次の作付予定圃場の土壌消毒を実施

アフェット®フロアブル処理時期

定植後2週間以内と、定植1か月後の計2回使用

